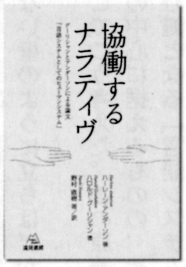

協働するナラティヴ

遠見書房　2013（152頁）

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
野村直樹（のむら・なおき）

世の中には翻訳を量産できる人がいる。ぼくはそういうタイプではない。これまで、編集本*(1)、単著、本からの一章の三つを英語から訳したにすぎない。心底から共鳴するものでないと訳す気になれないのだ。要するに翻訳には向いていない。

そのぼくが原著論文を訳すことにしたのは理由がある。その論文に出会ったのは一九九〇年、東京都精神医学総合研究所（都精研）の非常勤研究員だった時である。社会学の野口裕二さんが、「野村さん、すごい論文が出た。これ一緒に勉強しよう」と言って、いっしょに薄暗いコピー室でコピーを取ったのが発端だった。その論文が、ハリー・グーリシャンとその弟子ハーレーン・アンダーソンによる〝Human Systems as Linguistic Systems〟（1988）（「言語システムとしてのヒューマンシステム」）*(2)である。言語が組織や人間関係をつくっていく!? いったい何を言っているんだ？

それは、ポストモダンの世界観が「ナラティヴ」という名で産声を挙げてまだ一～二年のことである。その肝心の論文内容が、まったく理解できないのだ。歯が立たなかった。（そう、「ナラティヴ」とは、語り、物語、会話、対話などの総称である。）ところが、その後ぼくは、ナラティヴの領域で、編集本や単著を翻訳し、本を編集し多くの論文を書いた。そういう二〇年の遠回りのあと、ふたたびこの論文と向き合った。というのも、すべてがここに詰まっていて、すべてがここから始まったように思えたからだ。

読み直していくと二十年前がまるで嘘のよう。内容は手に取るように身近だし、その説明は、これ以上の明確さは無いと言わんばかりに迫る。こんなにはっきり書いてあるじゃないか。ぼくはこれまで何を勉強していたんだ!? ナラティヴについて考察されたことのすべてがこの論文からの派生に過ぎないと痛感した。自分の手で日本語にするぞ、そう決めた。

この論文は、言語的なやりとり、つまり相互行為としてのコミュニケーションが私たちの現実を形作っている（いく）という理論の提示である。この理論のことを現在では、「ナラティヴ」とも、いくぶんのニュアンスの違いはあるが、「社会構成主義」とも言う。手っ取り早いハウ・ツー（how to）を示したものではない。認識論の深いところでの転換を促すものである。臨床の現場に限らず、私たちの人間関係、関与する組織、人々の集まり、これらがすべて言語的なつながりをもって構成されている点に光を当てている。組織や集団や人間関係は、そこでの相互行為やコミュニケーションが生んだものであって、出来上がった組織や関係がそこでのコミュニケーションを規定しているのではない、あるいはそう考える必要はない。これによって、私たちの「現実」「悩み」「問題」は、言葉と言葉の交換によって書き換えられていく。

翻訳が出来上がったとき、ぼくは日本の相応のジャーナルに出版を依頼してみた。専門家に向けて専門誌上に書かれたものだからだ。編集長は理解を示してくれ、海外の古典文献の邦訳シリーズ第一弾にしたいと意欲的だった。編集委員会ではいったん了承されたが、その次の編集委員会で反対意見が出た。掲載は急遽中止となった。ジャーナルからは、代わりとして、一〇、〇〇〇字に要約すれば出版してもよいという通達をもらったので、やむなくそうした。ぼくが全文出版を諦めきれなかったところ、遠見書房から助け舟が来た。それが今回の出版である。*(3)

専門誌掲載の一原著論文を一般書店に並ぶ本として出版するのは、あまり例がない――論集として何本かを集めたものはよく見るのだが。この論文の場合、一論文としては長大でも、一冊の本としては短すぎる。一九八八年の出版だから二五年つまり四半世紀の時が経ち、ファミリーセラピー（家族療法）の専門家に向けてアメリカで出版されている。この時間的なへだたりと社会的背景の違いをどう乗り越えたらよいか。論文掲載時、この研究分野はどのような状態だったのか、著者自身や著者を取り巻く社会の様子は？ 二〇一三年の日本の読者にとって、これらが二重三重のハードルになっていくこ

とは間違いない、それがいかに優れた論文であったとしても。

この論文の重要な鍵概念の一つに「言語システム」がある。「システム」という言葉は一般システム論から来たものだが、ファミリーセラピーでは常套語のように使われてきた。だが「システム」という言葉は、いくぶん機械論的で冷たい響きをもつ。実際はもう少し暖かみのある意味、つまり「語り」が生む関係の連鎖を「言語システム」と著者らは呼んでいるのだが、初めて読む人はまずこの「言語システム」という言葉が、取り付けない壁のように立ちはだかる。

そこでこう考えた。この原著論文を本の中心に据えるものの、その前に読む鍵となる「言語システム」という概念をまず噛み砕いて説明しよう。つまり、助走の役目を果たす序章を書こう、と。そして、その次に論文そのものを載せる。ストレートに論文を読んだあと、読者が感じそうな疑問、質問をぼくが想像して著者に聞く。ぼくの想定した10の質問を著者ハーレーン・アンダーソンに紙上で答えてもらった。「第三章 Q&A ハーレーン・アンダーソンに聞く」がそれである。つまり、論文の著者である彼女はこの本の共同制作者である。

そのあと、この論文のもう一人の著者、ハリー・グーリシャン（一九九一年没）の人物像と彼を取り巻いた人々を紹介することで、読みが立体的になると考えた。そこで「第四章 ハリー・グーリシャンと仲間たち」という章を設けた。「ハリー」と呼ばれ親しまれた稀代のセラピストの人となり、と当時の周囲の様子を描きたかった。その時代的社会的文脈を素描することで、専門誌に綴られた言葉を、著者ハリーの生活と結びつけて読者は感じとることができるだろう。

しかし、まだなにか足りない気がした。それは、「翻訳という言葉のプロセス」の外にある言葉にしにくい微妙な部分だ。「ハリー・グーリシャンにもう会うことはできない」、そう思ったとき、ぼくは「そうか、ハリーに〝会いに〟行けばいいんだ」と気づいた。ハリーが臨床を始めた場所、彼の住んだ家、生活した街。また、ヒラメを釣り上げたロブ・ホロウィッツや煙草をやめられなかったモンティ・ボベルに会いに行けばいい、と考えた。

出版目前の二〇一三年三月、ぼくはメキシコ湾に面したテキサス州ガルヴェストンを訪れた。ロブ・ホロウィッツには会えなかったが、ヒラメを釣り上げたドックはそのまま残っていた。モンティ・ボベルをはじめハリーを知る多くの人に会って話を聞いた。ハリーの住んだ家は更地になり買い手を待っていたが、ドックはもとよりモーターボートも残っていた。ハリー・グーリシャンに少し近づけた、そんな気がした。こうしてぼくは、ハリーが〝語りかけてくれた〟とき、「あとがき」が書けた。

この本は、論文の著者であるハーレーン・アンダーソンとぼくが、今日の日本の読者に照準を合わせて共同制作したものである。原著論文のもつ専門性を薄めることなく提示し、同時にその背景、文脈、その後の進展などで二重三重に包み込んで届けようという企画である。日本文化を、Wrapping Culture（包みの文化）と名付けた人類学者がいるが、それに近いかもしれない。この本はもちろん、この論文でさえ、完成品ではない—進化の途上にあるアイデアの暫定的提示である。それは、会話におけるNot-knowing、「無知の姿勢」という一つの理想に向かう試行錯誤の軌跡と考えていいだろう。

この「あとがき」を書く旅でぼくは多くを学んだ気がする。それは、論文全体を包み込む〝空気〟のようなものに触れそれを言葉にすることの意義だった。それはまた、ハリー・グーリシャンの〝魔法〟の秘密を知ることでもあった。時代と文化をへだてて原著論文を訳す。綴られた言語を「枠付けている精神」をもって訳しきれているかどうか、本書を読んで判断してもらえればうれしい。多くの方が「あとがき」を褒めてくださったのは、意外であった。

文献

(1) マクナミー・S & ガーゲン・K（編）『ナラティヴ・セラピー：社会構成主義の実践』（野口裕二、野村直樹訳）金剛出版、一九九七

(2) Anderson, H. & H. Goolishian. Human systems as linguistic systems: Preliminary and evolving ideas about the implications for clinical theory. Family Process 27(4): 371-393, 1988.

(3) アンダーソン・H、グーリシャン・H & 野村直樹『協働するナラティヴ：グーリシャンとアンダーソンによる論文「言語システムとしてのヒューマンシステム」』（野村直樹訳）遠見書房、二〇一三